

児童養護施設入所児の代理養育者との愛着形成プロセス

— 幼児の愛着行動と代理養育者のかかわりの関連に着目して —

角 谷 友理香

問題と目的

家庭外の養育における養育者と子どもの関係性は、母子の愛着の質とは独立していることは明らかにされている (Howes & Segal, 1993)。施設養育における代理養育者との「オルタナティブ・アタッチメント」の形成は、子どもの発達を補償する重要な機会だといえるが (久保田, 2008)、入所児における代理養育者との愛着形成はどのような過程を経るのか、関係性の形成に、施設への入所時期や期間がどのように影響を与えるのかといったことに関する知見は乏しい。

Howes & Oldham (2001) は、愛着関係の形成段階において、子どもの多様性だけでなく、養育者のスキルの多様性も加味するべきだと述べており、職員とのかかわりの多寡やその内容が、安定した愛着の形成に大きく寄与していることが推測できる。職員のどのようなかかわりが安定した愛着形成につながり、その後も維持されることとなるか具体的な様相を明らかにすることは、現場の実践においても有益な知見となるだろう。

研究 1

目的：入所児の代理養育者との愛着形成プロセスの全体的な傾向を把握する。

方法：幼児期の入所児 60 名の養育を担当する職員に対して質問紙調査を実施した。質問紙は、入所児の愛着行動と代理養育者の養育態度の評価尺度から構成されており、「入所時 (担当開始時)」と「現在」の 2 時点における回答を求めた。得られたデータについて、各下位尺度がどのように関連・変化しているかを、対応のある t 検定と重回帰分析を用いて検討した。

結果と考察：幼児の愛着行動は関係性初期から現在にかけて、全体として安定した方向に変化していることが明らかになった。愛着行動の下位尺度の変化を検討したところ、「こころの理解」と「安全基地」は安定した方向に進んでいた一方で、「感情調節不全」の得点には大きな変化がみられないことがわかった。代理養育者である職員が愛着対象として利用していくことができている中でも、自己の感情を適切に表現していくことの難しさは容易に減じないことが示唆された。また、職員の統制的な養育態度が幼児の愛着行動にかかわる認知的な発達を促し、応答的な養育態度が入所児の安心感を育むことがわかった。更に、乳児院での情緒的なかかわりが愛着形

成の土台となっていること、担当が変更することによって一時的な適応が見られる可能性が示唆された。

研究 2

目的：入所児の愛着行動と職員のかかわりを確認すると共に、その変化のあり方の特徴を検討した。また、愛着関係が形成されている場合、その安定と維持につながった要因について検討した。

方法：半構造化インタビューを実施した。職員と担当児におけるかかわりにおける変化についての質問項目を設定し、語りを逐語録したものをデータとした。分析方法には複線経路・等至性モデル (TEM) を援用し、愛着形成の維持とサポートにつながった要因について TEM 図を用いて検討した (figure)。

結果と考察：入所児が職員とのかかわりの中で〈担当であることを意識する〉こと、〈個別のかかわりをしてもらう〉こと、〈コミュニケーションを促してもらう〉こと、〈できるようになったことを認めてもらう〉ことによって安定した愛着関係が形成されていくことが分かった。また、愛着関係が形成されていく中で、入所児に不安定な愛着行動がみられる時期があり、職員が入所児へのかかわりを変化させていく動きがみられた。

総合的考察

研究 1・2 から、愛着形成の重要な時期である幼児期において、喪失体験を乗り越えて代理養育者が愛着対象となり、施設の生活の中で安定していくプロセスが示された。内的作業モデルは、自分にとって重要な他者との相互作用によって形成されていき、このような内的作業モデルが作り出されるときに日常的な繰り返しが必要であるとされている (Stem, 1985)。施設養育という「日常」の中でやりとりを重ね、お互いを知り理解していくことが、安定した愛着関係及び内的作業モデルの形成とその維持につながっていると考えられる。

離反移入の激しい施設養育においては、「今、ここ」でのかかわりの質と量を高め、それを積み重ねていくことが何よりも重視されるといえるだろう。

